OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ボンヘッファーの人間学
Author(s)	岡野, 彩子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49471
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【３】

氏名	岡野彩子（おかのあやこ）
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学位記番号	第２３２３８号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	**ボンヘッファーの人間学**
論文審査委員	（主査） 教授　尾上新太郎 （副査） 名誉教授　細谷　昌志　　教授　小林　恭　　教授　高田　珠樹 教授　小野　清美

本論文の目的・方法

本論文の主たる目的は、反ナチ抵抗運動に参与して処刑されたドイツ福音主義教会の神学者・牧師であるディートリヒ・ボンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer 1906.2.4 - 1945.4.9）の思想を、一時代精神の先駆者という先入観からも、また教義学的な枠からも解放し、これまでほとんど未開拓であった人間学的視点から再解釈することにある。取り巻く時代状況とボンヘッファーの実存とを切り離すことなく、その思想を可能な限り忠実にとらえ、その人間学の特質を取り出すだけではなく、倫理学的・他者論的関心から、今日における実存的意義を解明することを目指す。

第一章　Grenze(限界・境界)から見るボンヘッファーの人間学

第一章においては、Grenze（限界・境界）をキーワードとして、ボンヘッファーの人間学の特質を取り出すことを試みる。

まず、ボンヘッファーの理解にしたがって、人間の《業》（可能性）から内在的に人間を理解する《哲学的人間学》と、人間の《限界（グレンツェ）》としての《超越》、つまり神との関わりから人間を理解する《神学的人間学》を区別する。

次に、『創造と堕落』（1933）を取り上げ、旧約聖書「創世記」の釈義から、創造・堕罪・救済の過程を通していかなる人間学が形成されているかを考察する。その解釈によれば、創造の世界における《神のかたち》としての人間は、根源である神との一致において生きていた。しかし《中心の境界（グレンツェ）》を踏み越えて罪に堕ち、いまや神とも、他の人間とも、自然とも、自分自身とも分離した《分裂》状態にある。この状態は、十字架の贖罪によって、すでに神と人類の和解が成立している《仲保者》イエス・キリストを《新しい中心》とすることによって遮断され、回復にいたるとされる。

この《仲保者》イエス・キリストについては、キリストが誰であるかを問うた『キリスト論』（1933）において詳細に論じられており、人間実存・歴史・自然の中点としてのキリスト、代理的愛の体現者としてのキリスト、《人間のロゴス》の限界（グレンツェ）を意味する《神のロゴス》としてのキリストといった議論が展開されている。最終的には、この《神のロゴス》としてのキリストに聴き従い、彼にゆだねられて隣人愛を実践する人間観を明らかにする。

第二章　ボンヘッファーの人間学における良心論

第二章においては、堕罪後の人間が巻き込まれた《分裂》状態における自分自身との分離の問題を、失われた統一を求める《人間実存の呼び声》としての良心の問題として取り上げる。ボンヘッファーにおける良心概念の発展を概観した上で、とくに抵抗運動に関与するなかで、《罪の引き受け》という問題に直面して形成された良心論を、彼の死後に断片が編集された未完の著『倫理』（1949）を中心に考察する。

従来、ボンヘッファーにとって良心という概念は、いわば哲学に属するものとして、神学的立場から批判的に見られたものであると解釈される傾向があった。なぜなら、彼の全著作を通じてほとんどの場合、良心は、自律存在たる人間の自己完結した思惟のなかで下される善悪の判断、あるいはその独断に基づくより《良い》自己の把握ないし認識として、批判的に叙述されているからである。しかし本論文においては、彼が獄中書簡のなかで、自分がたどってきた実践の道をふり返り、「最善の良心において行われた」と発言していることに注目し、その良心概念を再検討することを試みた。最終的には、「イエス・キリストが私の良心となった」というあり方が示されており、それは自律と他律の区別を超える《キリスト律的良心》と呼ぶに相応しいものであることを提言する。

まず、欧語の良心には《共に知る》という意味があり、誰（何）と共に知るかによって、その知のあり方自体が変わってくることを示す。西洋の伝統においてそれは、大きくは、自分自身（自律的良心）・他者（他律的良心）・神（神律的良心）との共知に三分類され、ボンヘッファーの良心論においても同様の表現があらわれる。すなわち、第一に、人間実存の中心を《アダムにおいて》求める《自律的良心》、第二に、人間実存の中心を《ヒトラーにおいて》求める《他律的良心》、第三に、人間実存の中心を《キリストにおいて》求める《キリスト律的良心》と呼ぶべきあり方が言及されている。

『倫理』における良心についての思索は、ボンヘッファーのヒトラー暗殺・クーデター計画への参与が最高潮に達した時期になされている。ユダヤ人大量殺戮という事実を前にして、なお「殺すなかれ」という非暴力による服従の倫理は妥当するのか。この問いが彼をとらえ、《罪の引き受け》の決意という問題に直面していたと思われる。この場合、良心が、どこに《実存の中心》を求め、誰と《共に知る》かということが、重要な意味を持ってくる。それによって、何に違反することをより大きな罪として認識するかも変わってくるからである。自律存在としての人間においては自分で発見した《普遍的法則》が、ナチスが他律に席をゆずった場合には《ヒトラーの意志》が、信仰においては《神の意志》が、善を知る拠り所とされる。この相違が、より大きな罪を避けるためにより小さな罪を引き受けるという態度にも相違をもたらし、異なる行動に導くことにもなるのである。

ボンヘッファーにおいては、キリストに従うなかで知られる《神の意志》を行うことが問題であり、神と隣人を愛するがゆえに罪を引き受ける場合、法規範（律法）に原則的に拘束されることから解き放つ《福音的自由》というものが確保される。そのことに関しては、「責任を負う生活の構造」というテーマのなかで詳細に論じられており、神の言葉にたいする全人格的な応答（Antwort）としての《責任》（Verantwortung）を担う人間のあり方が、人間的《ラーティオ》を超えて《ウルティマ・ラーティオ》にいたるぎりぎりのところまで徹底して考えぬいた跡が見られる。その思索を追いつつ、「服従において人間は神の十戒に従い、自由において人間は新しい十戒を創造する」という他律と自律を超

える高次の統一としての《キリスト律》を発見してゆく《キリスト律的良心》と呼ぶにふさわしい良心のあり方に言及されていることを示したい。

第三章　ボンヘッファーの《成人した世界》における人間学

最終章においては、ボンヘッファーが生涯最後の一年に書いた獄中書簡のなかで、「新しい神学」と呼ばれるものに注目し、そこで到達した人間観を考察する。誤った《この世》理解としての《宗教》ではなく、《真のこの世性》を生き、《他者のために》仕える《成人》の姿を描き出し、その人間学が持つ現代的意義を明らかにしたい。

「新しい神学」には、「成人した世界」・「無宗教的キリスト教」・「神の前で、神と共に、神なしに生きる」といった刺激に満ちた標語が登場し、1960年代には、英語圏を発信地として、世界的な注目を浴びることになった。それは、世俗化の問題に直面したキリスト教世界において、《世俗化の神学》や《神の死の神学》の文脈において呼び出され、《神の死》ないし《内在する神》といった新しい神概念に基づくキリスト教理解が見られるとの解釈が目立った。本章においては、ボンヘッファーの人間観の発展をその生涯を通して考察することによって、彼が生涯最後の時期にいたって、突如として《超越》から《内在》へと振り子を転じたのか、それまでの思想との《断絶》がそこに生じたのかを再検討することを試み、そもそも世俗化の議論におけるボンヘッファー解釈は、キリストゆえにユダヤ人の苦難に参与するという、彼の中心的な問題意識をとらえていたかどうかを疑問に付す。

ボンヘッファーの歴史的考察によると、およそ13世紀にはじまる《世俗化》の発展は、さまざまな分野で有神論の原理を否定し、自律的な人間によって支配された諸領域から《神》を放逐するにいたった。人間の認識や諸能力の《限界》において呼び出される《作業仮説としての神》や《機械仕掛けの神》は破棄され、いまや《宗教的》な関係から解き放たれた《成人しつつある》人間があらわれる。未成人の世界、つまり《宗教的》な世界は、より多く、いわば擬似宗教的なものへと傾く誘惑にさらされている。これにたいして、成人した世界、つまり無神的な世界は、かえって真実な自己認識へ、そして真実な神信仰へと通じている。かくして《宗教》の神から、聖書の神へと目が開かれると言う。人間の《成人性》は、神にとって代わろうとするのではなく、むしろ自立した人間による主体的なイエスへの服従へと導くとされる。

このような《成人性》への歩みの全体は、人間と共にいる神自身の道としてとらえられ、ボンヘッファー独特の《十字架の神学》を援用して根拠づけられている。十字架上のイエスを見捨てる神は、彼が「わが神、わが神」と信頼をもって呼びかけた神であり、ここには逆説的な神認識および神信仰があるとされる。つまり、イエスを見捨てる神が、彼と共にいる神として認識されているのである。ボンヘッファーにとってそれは、自分自身をこの世から追いやられるにまかせ、「たとえ神がいなくとも」この世を生きてゆかねばならないとの認識へと導き、人間が自分で諸問題を解決できるように自立させる神である。この世から放逐される神は、この世において無力で弱い。しかし、まさにその弱さによって、われわれを助けると言う。イエスの十字架において《無力なもの》・《苦難するもの》として現在する神は、いわゆる《全能》によるのではなく、この世と苦難を共にする神である。そこで人間は、もはや自分の苦しみだけではなく、この世における神の苦しみを受けとめ、苦しむものたちの交わりへと呼び出され、苦難は、いっそう高次の苦難へと転じられるのである。

ボンヘッファーは、イエスの自分自身にまったく囚われぬ自由、他者を真に愛する愛にこそ《全能》を見出す。神と人間の関係は、この《他者のための存在》における新しい生、イエスの存在に与ることにある。彼の《宗教》批判によれば、宗教においてはキリスト抜きに世界が理解され、つねに部分的なものとなり、生の全体をとらえることはできない。イエスは、そのような《宗教》にではなく、この世の真っ只中で《他者のために》仕える《成人》の生へと呼び出す。《宗教的行為》ではなく、《他者のために》苦難を背負う神の苦しみに与り、隣人愛を実践することが、人間を造ると言う。

このような、ボンヘッファーの生涯における最後の時間になされた苦しむ人びとの視点に立った思索は、《共に苦しみを背負う》という倫理の基本的な態度の前に、われわれを立たせるものである。またここに、彼の人間学の現代的意義が見出されると思われる。

論文審査の結果の要旨

本論は、ディートリヒ・ボンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer 1906.2.4-1945.4.9）の人間学についての研究を行ったものである。ボンヘッファーは、敬虔なキリスト教徒であり、神学者だったが、反ナチス運動に加担し、処刑された人物である。キリスト教徒であることと、ドイツ国民として国法を守らなければならないということとの間に、ボンヘッファーは、矛盾を感じ、この矛盾の解決のために、彼は、そもそも、人間とは何なのか、本来、どう生きるべきものなのか、という問いを立てたのである。

この点、ボンヘッファーは、神と人間との分裂という事態に着目している、という。結果、人間が、神のように振る舞うようになった、とも。無論、ヒトラー等を意識しての発言である。

ボンヘッファーは、倫理学に興味を持ったと言ってもいいが、倫理学には、良心の問題が基本的にある。この点、論者は、「良心」という語の意味概念を、語学的見地から、広く、詳しく考察している。で、ドイツ語（Gewissen）にも、語源的には、「共知」の意味があり、日本語のケースとは、相違することを指摘している。「共知」とは、「(何者かと）共に（何が善なる行いかを）知る)」ということであり、そこでは、自律的善行、他律的善行、神律的善行の三通りが考えられるわけだが、ボンヘッファーが選んだのは、神律的善行だった、とする。

最後に、ボンヘッファーの神学の特徴について考察している。そこでは、他人の苦悩に積極的にかかわることが説かれる、という。これは、倫理学の基本問題でもある。ただし、その行動が神の人間愛に参与することになるという考えを、ボンヘッファーは、同時にもち、そして、そういう行動が、人間を真の人間に成長させる一つの段階と考えた、という。こういう点に、ボンヘッファーの神学の特徴を、論者は見る。

ボンヘッファーの人間学という問題意識は、研究史上、斬新なもので、また、ボンヘッファー理解の正当な切り口とされる。全体として、論考は、詳細、かつ、明晰である。精神として規定された人間にとってのあるべき行動という点で、示唆に富む、とも言える。これらからして、学会に寄与するところも大である。以上のことから、私たち審査委員は、全員一致して、本論文に、最終試験同様、合格の判断を下した。